

## 自分で育てたブドウで 大船渡のワインをつくる

Three Peaks Winery (スリーピークスワイナリー) 代表

及川 武宏 さん

【岩手県】



地域との  
繋がり

きずな

### 震災以前のこと

私は大船渡の生まれですが、震災当時は東京のコンサルティング会社で企業関係のコンサルタントをしていました。職場は新宿の高層ビル群の中にあるオフィス。辞めてバックパッカーという格安のゲストハウスを作ろうと考えていた矢先に地震が起きました。

### 震災から現在

当日は新宿のオフィスにいました。14階でしたのでかなり揺れました。徒歩とタクシーでやつのことで埼玉の自宅に帰りました。古里の大船渡が大変な事になっているのはニュースで分かっていました。実家の両親と連絡が取れたのは2日後の夜、東北にいる2人の弟も幸い無事でした。

5月に会社を辞めるまでは被災地に物資を運ぶなど、個人で支援活動が続けました。その後、東日本大震災復興支援財団に入り、最初に高校生向けの奨学金事業を作りました。震災が起きる前の環境は当然無くなりましたし、その環境によって自分がやりたい事が出来なくなる高校生が多くなると思ったんです。両親が働く環境がなくなってもバイトをしなきゃいけない、その為に学校に行くことが出来ない。そういう子どもを一人でも無くそうと、高校生が夢を諦めなくていいように、返済はいらぬ給付型の奨学金を作りました。

実は震災が起きる数年前からバックパッカーとともに、地元でのワイナリーの構想も温めていました。財団の事業をやりながら地元に来る事をやろうと、大船渡に戻る決心をしました。地域に外国人を呼びたいと思っていたんですね。僕もそうでしたが、大船渡の子どもたちは外の世界を知らない。幼い時から色んな視野を広げてもらいた

い。だったらそういう環境を作ってあげよう。元々は東京にバックパッカーズを作ってそこをハブとして東北に外国人を連れてきたい、と考えていたんですが、大船渡でワインの生産からワイナリーを軸とした観光ビジネスまで出来ないかと、考えたわけです。

ワイナリーをやりたいと考えた根底には、ワーキングホリデーで訪れたニュージーランドで、ブドウ園で働いた経験もありました。小さなワイナリーが点在するその町には、海外から大勢の観光客がやって来ました。その町と大船渡って似てるんですよ。

2013年5月、スリーピークスワイナリーを立ち上げました。ブドウは植えてから収穫できるまで3年ほど掛かるので、他の農園から買い付けた果実で岩手県内の醸造会社でつくったワインを売っています。陸前高田市にあるリングゴ園も引き継ぎました。リングゴ園の木は老木が多く、手間はかかるんですが、美味しいリングゴになるんです。

財団の仕事も継続していて、宮城のジュニアアスリート育成事業というスポーツを通して人材を育成する事業もやっています。

### 将来のビジョン

まずワインに関しては大船渡市内にワイナリーを作って、自分で育てたブドウで大船渡のワインを作りたいというのがここ数年の目標。次に、子どものために交流人口を増やしながら三陸リアス海岸エリアにワインバレーを作りたい。大船渡市ってスペインの小さな町と姉妹都市なんです。さらにリアス海岸もスペインが発祥なので、漠然とですが、その繋がりも生かして、世界の文化も受け入れて融合したものを作れないかなというビジョンもあります。

### 及川武宏さん

及川さんは震災後に東日本大震災復興支援財団に所属後、地元である大船渡市に戻った。三陸を思い出す美味しいワインを造りたいという思いから、ブドウ畑を始めました。リングゴ畑も譲り受け、シードルの開発も進めています。将来はワイナリーを通してこの地に多くの外国人が訪れ、子どもたちが刺激し合える場所になって欲しいと願う及川さんに地域と農業の繋がりについて話っていた。



### 中高校生へのメッセージ

過去の事とかあんまり考えずに未来をしっかり見て欲しい。今、自分が何をやりたかを常に問い続けて、やりたい事を必死にやって欲しい。今、本当に何が出来るか、何がしたいか、自分の好きな事を好きなだけやってほしいなと思います。